

博士学位論文審査要旨

2022年1月28日

論文題目：炭鉱において「女である」こと—労働と性愛と生命再生産から考える

学位申請者：姜 文姫

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎

要 旨：

姜文姫氏提出の学位申請論文は、森崎和江の著作と活動を検討することにより、炭鉱における「女である」ということを明らかにし、それを本論文の考察の枠組みにすることにより、炭鉱をめぐる文学作品、映像、文化運動を具体的に考察するものである。全体は序章と終章をふくめて全8章構成になっている。以下その内容を述べる。

序章では、これまでの炭鉱における女性史研究を批判的に検討している。これまでの研究では、労働組合に対して日本炭鉱主婦協議会（炭婦協）として組織される女たちの活動が主として取り上げられてきた。他方で、こうした「主婦」あるいは近代家族を前提にした考察の枠組みに対しても、批判がなされてきたこともサーベイされている。また炭鉱をめぐるは新生活運動をはじめとする政府や企業からの介入があり、「家庭」や「女」がこうした介入の場となってきたことも、これまでの研究から検討されている。

第一章では、森崎和江の著作と活動を検討することにより、炭鉱において「女である」ということがいかなる文脈や論点を抱え込んでいるのかということが、森崎を通して明らかにされている。これまで森崎和江をめぐるは、谷川雁たちとのサークル運動や「大正行動隊」などの労働運動との関連が研究されてきた。他方で、サークル運動後の森崎の活動においては森崎の植民地朝鮮での経験が議論されている。またサークル運動の中で森崎が上記の炭婦協や婦人会にたいして批判的であったこともこれまでの研究で明らかになっている。こうした中で姜文姫氏は森崎の炭鉱での活動が戦前期の植民地経験の延長線上にあるということ、また主婦や母という領域が森崎にとって極めて重要であったということを丁寧な文献研究から明らかにした。そしてこの姜文姫氏の森崎和江論が本論文の全体の方法論として提示されている。

第二章では、森崎から見出された視座から、これまで炭鉱を扱ってきた上野英信、帯

木蓬生、畑中康雄、井上光晴、渡辺淳一、高橋揆一郎などの文学作品を検討している。その結果、炭鉱に関わる文学において、「女である」ということが、また植民地主義あるいは植民地経験ということが、文学の隠された主題として一貫して存在していることが明らかになった。

第三章と第四章は、北海道の太平洋炭鉱における「主婦」たちの活動を取り上げている。まず第三章では、森崎が批判した炭婦協や主婦会の活動が、労働運動とも密接にかかわりをもっていたこと、また労働運動のみならず、地域社会との連携を作り上げていったことなどが、具体的に検討されている。またこうした「主婦」たちの活動が、1950年代の母親運動とも連動し、国際的な平和運動にもつながっていったことが明らかにされている。ここでは「主婦」であるということは、政治の結節点だったのである。第四章では、太平洋炭鉱主婦会の刊行していた冊子『母のうぶごえ』を丹念に蒐集し、こうした「主婦」たちの活動を丁寧に検討している。そこでの議論の焦点は、同時代的に展開していた生活綴方運動であり、生活記録運動である。ここでは、第三章で浮かび上がった母親運動といった大きな政治運動との結合ではなく、書く、そして読むという行為において構成されていく関係性が重視されている。こうした関係性は、女たちの新たなつながりを生み出し、また地域を超えた連携へと発展していった。またいいかえればこうした書くそして読むという運動の中で展開していく関係性は、「主婦」や「家庭」あるいは労働組合といった構図においては逆に隠蔽されていくことが指摘されている。この第三章と第四章から浮かび上がるのは、「主婦」をめぐる二つの政治の在り様である。一つは同時代のより大きな政治組織との連携にかかわることであり、いま一つは、政治とされない領域における関係生成的な動きである。この二つの政治が重なり合うところに「主婦」が存在するのであり、そこに炭鉱において「女である」ということを姜文姫氏は浮かび上がらしたのである。かかる「女である」ということは、森崎が谷川たちとのサークル運動への批判として始めた『無名通信』に通じるものがあり、また森崎自身が自らの活動の外に置いた主婦会に、森崎が見ようとした「女である」ということの可能性が広がっていることを、姜文姫氏は明らかにしたのである。

第五章、第六章は、炭鉱における「女である」ということを、映画表象をめぐって検討している。第五章では亀井文夫の「女ひとり大地を行く」がとりあげられ、第六章では安本末子『にあんちゃん』の日韓両国における映画化が検討されている。そこからは炭鉱に関わる映画表象が、女と植民地支配の記憶が交差する形で登場していることが明らかになった。

審査では、個々の章の強い説得力にくらべ、全体像が見えにくいといった指摘があった。しかし文学作品、文化運動、映画表象を徹底する炭鉱で「女である」という問いを追求した本論文の意義は失われることはないということも確認され、論文審査委員会は、姜文姫氏提出の学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

2022年1月28日

論文題目：炭鉱において「女である」こと—労働と性愛と生命再生産から考える

学位申請者：姜文姫

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎

要 旨：

姜文姫氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、2022年1月28日（金）の13時00分から14時30分まで行った。姜文姫氏の専門分野である歴史学、とりわけ日本戦後史にかかわる専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学（日本語ならびに英語）の能力についても質疑がなされ、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 炭鉱において「女である」こと―労働と性愛と生命再生産から考える

氏名： 姜 文姫

要旨：

本論文は近代日本の炭鉱における女性の労働と文化運動にフォーカスを当て、女性の視点から炭鉱という場所が持った重要性を検討した。森崎和江の著作の分析から、九州の筑豊炭田における「聞き書き」という手法と炭鉱の女性労働者がもつ恋愛・出産・坑内労働を切り分けられない労働感覚に着目し、同時代の炭鉱のジェンダーの再編成によって周縁化された領域を明らかにした。また北海道の太平洋炭鉱の資料から基礎研究を進め、戦後北海道における主婦会の展開や生活綴方欄に出た男性中心的な労働組合や中央の主婦会とは異なる点を明らかにした。

明治日本の産業遺産として九州の炭鉱が再評価され、廃鉱となった炭鉱は、再利用された施設とともに、近代化の象徴として懐古の対象となっている。2011年には九州筑豊の炭鉱労働・生活を記録した山本作兵衛の記録画がユネスコ世界記憶遺産に登録され、2015年には「明治日本の産業革命遺産」として三池炭鉱や端島炭鉱（軍艦島）が世界遺産に登録された。北海道でも2009年に「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」が設立され、夕張や岩見沢など道央を中心に産業遺産としての炭鉱に注目が集まっている。

今まで産業史や労働組合史として歴史化されてきた炭鉱は、ジェンダー史や生活史研究から炭鉱特有のジェンダーの再編成の分析が進められてきた。先行研究では炭鉱における女性を対象にした研究が進展しつつあるが、「主婦」や「家庭」などのイデオロギーの成立と批判に力点が置かれ、炭鉱における女性の生活レベルでの実態やイデオロギーからの逸脱した日常生活に対して十分な検討が加えられてこなかった。また地域的な偏りも存在し、三井三池炭鉱や端島（軍艦島）のある北九州から長崎にかけての炭田地帯に研究が集中し、日本国内のもう一つの炭鉱地帯である北海道の炭鉱については資料整理や基礎研究が十分になされていない状況にあった。

本論文の特色は、文学研究・ジェンダー史研究の方法によって炭鉱の文化運動・女性や子供の書き手による生活綴方のテキストから日常生活と労働の関係性を明らかにし、女性の視点から近代遺産化傾向と生産力主義そして家族主義を批判的に問うことにある。

上記の問題意識のもと第1章では、植民地朝鮮の出身で九州の筑豊に移り住み「サークル村」にかかわった森崎和江の著作から、聞き取りを通じて行われた戦後の筑豊炭田における「家制度」にとらわれない炭鉱の女性労働者の在り方に着目し、サークル誌を通じた女性の文化運動と連帯の場の思想的側面を森崎の朝鮮経験との関連から明らかにした。森崎は植民地朝鮮生まれ育ちという出自による居場所のなさを戦後日本において感じ取り、「女である」ことを出発点として炭鉱での聞き書きを行った。森崎が「女である」認識にたどり着くプロセスには日本人教育者である父・森崎康次の自由主義と植民地へ渡ったことにより家制度の外部へと抜けだし恋愛結婚により核家族を形成した森崎の家庭がある。戦後空間において父について考え、調べ、朝鮮を考えることが森崎の思想の出発点であり、「朝鮮」を単なる過去ではなく「回路」として設定した。その上で、森崎が自身の「女である」認識を元に戦後日本の男性中心主義へ投げかける批判が、1960年代の著作（『闘いとエロス』『第三の性』詩『狐』）と女性の労働と性を軸にした聞き書きに含まれていると分析した。森崎の聞き書きから炭鉱労働と「女である」ことの間を見出すことが可能である。

第2章では、戦後の炭鉱を舞台にした小説を取り上げ、二つの論点を設定した。一点目は、森

崎が自分のなかにある「女」を根拠にして戦後を生き抜こうとしたように、炭鉱において「女である」ことはいかなる文学的表現を獲得しているか。二点目は、近年近代化遺産として注目を浴びている炭鉱という場所の問題である。文学的表現を通じて炭鉱に関わった人々の置かれたより複雑な状況を理解することが可能である。この二つの論点において文学作品を読み解き、労働と労働力による生産中心の場所であった戦後日本の炭鉱を、女性の性・性愛と労働というテーマで論じるべき場所、歴史的にジェンダー規範が争点となっていた場所であると位置付けた。

第1節では炭鉱に存在した「アリラン部落」を題材にする上野英信「あひるのうた」(1954)と帚木蓬生『三たびの海峡』(1992)を取り上げた。第2節では炭鉱会社に属している労働者ではない周辺の人々を書いた畑中康雄の作品「泥だらけの記」(1956)「後山」(1956)を検討した。第3節、第4節では原子爆弾投下による被ばくと被差別部落、朝鮮人、炭鉱などが重層的に書かれた井上光晴の『虚構のクレーン』(1960)と「地の群れ」(1963)を取り上げ、炭鉱という場所がそのような戦後の矛盾＝「闇」、ジェンダーの問題をあらわにしていることに焦点を合わせる。第5節では大衆作家であり雄別炭鉱病院での勤務経験がある渡辺淳一の「廃礦にて」(1976)において、北海道の炭鉱で何度も妊娠しては中絶を繰り返したあげく命が危険になった女性について検討し、炭鉱における産児制限と生殖関連政策を論じた。第6節では北海道歌志内市の炭鉱町出身である高橋揆一郎の作品を取り上げ、炭鉱の独自のともいえる血縁で結ばれていない人々の人間関係を論じる。このように炭鉱を背景にした文学作品の検討を通じて、池田浩士の『石炭の文学史』(2012)の問題意識—近代産業遺産としての炭鉱でなく炭鉱に関わる人間たちの葛藤、悩み、格闘を考える—に即しながらも、男性と区別される女性の経験、性と労働の問題が女性に限らない問題であると認識し、炭鉱という場所を再考察する必要があると考える。

第3章では、森崎の「主婦」「母」などの名を「無名」に取り戻し「女である」ことへの着目を念頭に置きながら、「主婦」と「母」を名乗りその名の下で行われる運動に注目する。特に炭婦協、道炭婦協、それらと密接に関わりを持ちながら活動した太平洋炭鉱主婦会を検討する。炭婦協関連資料、釧路市中央図書館に所蔵している関連資料を活用しながら道炭婦協とも関わり活発に運動を行った太平洋炭鉱の主婦会の労働運動と母親運動を取り上げる。主婦たちの「母」としての運動・政治的領域への参加は、女性と平和の結び付ける本質主義的女性観でなく、母性を産む性として規定するものでもない。「母」となることは運動の担い手の政治参加へモチベーションを与える役割を果たしているといえる。

第4章では太平洋炭鉱主婦会が1955年から発刊した『母のうぶごえ』の「生活綴方欄」を主に取り上げ、「主婦」の女性たちが生活綴方という形式を通して何を目指したかを分析する。一般的に石炭合理化政策、具体的には賃金制度や福祉政策の変化とともに、女性の労働と位置は家庭内に限定されるものとして見なされてきた。男性の稼ぎ労働と女性の家事・再生産・育児労働、つまり「性別役割分業」が定着した。第1章でも触れたように森崎和江は坑内労働への聞き書きを通じて「家」「家庭」の枠に消えていく女性の労働を取り戻そうと試みた。機関誌『母のうぶごえ』の活動＝主婦たちが自分たちの暮らしや日常を書き、話し合う生活綴方の実践こそ主婦自身のあり方を方向付ける。主婦たちの生活を書く行為は家族、子供を通してしか語れない生活を書く行為であり、「家族」と「家庭」がその「文化運動」を成立させるのである。これは森崎和江の「女である」認識とそれに基づく「性」と「労働」の捉え方と対称であり、戦後日本の炭鉱における女性たちの暮らしと関わる労働運動の形態を提示している。

第5章では、炭鉱と関わる戦後の日本映画を取り上げ、炭鉱における女性とその性/性愛、労働が如何に表現されているかを分析する。太平洋炭鉱の主婦会も制作に関わった『女ひとり大地を行く』(1953)の後半は実際に太平洋炭鉱でロケが行われた。この映画は東北地方から北海道の炭鉱に出稼ぎに行った夫を訪ねてきた女性が戦前・戦中・戦後という時間を坑内労働と選炭場の仕事などをしながら生きる姿を描いている。映画の撮影体制と内容分析を合わせて行い、女性の労働と性愛のせめぎ合いを論じる。第6章では佐賀県の中小炭鉱を舞台にした映画『にあんち

ゃん』(1959)の分析を行う。この作品は1953年から1954年にかけて書かれた在日朝鮮人少女の日記を原作とし、1958年に韓国と日本で同時に映画化される。日韓関係が硬直している時代的狀況を踏まえながら、原作と映画の比較分析、そして日本の映画により克明に現れる性(優生思想と産児制限、恋愛)と朝鮮人問題を中心に論じる。

以上の文学作品、サークル誌、映像分析から、近代日本の炭鉱は女性の性と労働、生命再生産の異なる可能性がある場所であり、男性中心主義、性別役割分業などジェンダー規範が争点となっていた場所であることを明らかにした。